

44 永坂石埭せきたい（周二）の小伝と日本整形

外科への功績

蒲原 宏

日本に独立科名の「整形外科」が決定されるにあたり、田代義徳（一八六四—一九三八）の陰の力となった明治の医学界での漢詩人の第一人者永坂石埭せきたい（一八四五—一九二四）について詳しく知られていないので報告する。

田代義徳は明治三九年四月四日、新講座を独立開講公示に先立ちドイツ語の Orthopädische Chirurgie の翻訳にあたり、親友の入沢達吉（一八六五—一九三八）と合議し医学界の漢文学者・詩人・書家の最高峰にあつた東京市医師会神田支部長でもある永坂石埭に教示を仰ぎ「整形外科」と命名したのである。

ortho のギリシヤ語の語源と対比し『説文』の「整・齊也、从支、从人束正、正亦聲」の文と、その注「撃傳」にある「束之小撃之使正會意」によって「矯正」の意味

は「整」の一字に包含され「整」は「正」の字に比して働くの意味があると詳しく考証した。partie は語源的に小児を意味するので直訳しては実際と異なつた表現になるから、Delpach J.M.（一七七〇—一八三二）の提唱した Orthomorphie の morphie が「形」の文字にあてることが理にかなつているとし「整形外科」を新科名とした。田代はその理由を「整形外科ノ説」とし、日本医事週報第六一六号（明治四〇年一月一日）に発表した。

永坂石埭は本名周二、石埭は雅号。尾張藩医永坂氏の支家で初代順治、二代周二、三代周輔（のち周二は御目見医師（外科専門・諱・徳彰・号・一桂堂、一八〇七—一八六七）の長男として弘化二年（一八四五）九月二三日名古屋城下に生れた。基礎学は藩校、本道・外科を父に学び、明治戊辰戦争には四代目として従軍、明治七年頃上京、明治一七年五月一五日には従来の履歴により医師免許を下附された。東京神田松枝町二三で開業したが、漢詩人梁川星巖の玉池吟社の旧趾をつきとめ、玉池仙館を設け、明治時代漢詩人の本拠とした。漢詩は同郷の詩人森春濤につき門下の四天王と称された。

詩文を鷲津毅堂に学ぶ傍ら、中国文学、絵画、茶道に精通し、清国の書家楊守敬（一八三九—一九一五）の来日の影響を受け北碑派の書法を学び、石球流と称される書風が世にもてはやされ一級の文化人であった。雲仙山上のロベルト・コッホ来日碑、月ヶ瀬詩碑、偕楽館碑、松島瑞巖寺碑、朝鮮人震災横死之碑（日泰寺）「其志念堅固有大忍辱力」報恩塔（照遠寺）等全国に執筆の詩碑—墓碑を残した。

生前詩集を編することがなく、大正六年名古屋市長者町三丁目松坂屋所有の残月庵に隠れ傍に一桂堂を建て老後を送っていたが、大正一三年（一九二四）八月二四日七九歳で病没した。照遠寺（名古屋市中区東桜二）に葬られたが現在は平和公園内の照遠寺墓域に先祖の墓と共に移された。碑銘には「石球先生之墳」とあるだけである。法号は孝徳院猷学石球日周居士。東京原町幸国寺に分骨されている。夫人ふさ子との間に一男一女があったが女子は夭折している。長男源一は旧制第五高等学校から大阪帝大医学部を卒業精神科医を志し、ドイツに留学したが大正一五年三八歳で病没。遺児匡子に伊藤博輔を迎え

永坂家を嗣ぎ、和也、具也（東海大学教授）、佳子、恭子の四子がある。永坂家（東京都杉並区下高井戸一—一八一三）には石球の遺文・遺作が守られている。

石球の実弟承桂（一八四九—一九一〇）は尾張藩医柴田龍溪の養子となり、藩貢進生として学びドイツ留学後、東大初代薬物学教授を歴任した薬学博士第一号の柴田承桂である。

承桂の長男柴田桂太（一八七七一—一九四九）は植物学者・東大教授・学士院恩賜賞（一九一八）で授与されている。弟の柴田雄次（一八八二—一九八〇）は化学者の東大教授・文化功労者であり、兄桂太との共同研究で有名、学士院恩賜賞（一九二七）を受け、初代東京都立大総長。長男南雄は東京芸大教授等を歴任した作曲家・音楽教育家。桂太の子承二は東大薬学部教授・学士院賞（一九七三）を受賞している。永坂・柴田両家の日本文化への寄与は大い。

石球は有栖川宮に仕えたとか、長州藩医として従軍、大学東校で教職についたという記載もあるが、資料的に確認できていない。（日本歯科大学医の博物館）